

ポパちゃんの

あれあれ物語

サトウ ハチロー 作／小林和子 絵



918.8	サトウ ハチロー
	サトウハチロー・ユーモア小説選 19 ポパちゃんのあれあれ物語 サトウハチロー作 小林和子 絵 東京 岩崎書店 1980 245 P 19.5cm

サトウハチロー・ユーモア小説選 19
ポパちゃんのあれあれ物語

一九七九年四月十五日 第一刷発行
一九八〇年十二月二十五日 第二刷発行

著 者 サトウ ハチロー

画 家 小林和子

発行者 森山甲雄

発行所 株式会社 岩崎書店

〒112 東京都文京区水道二丁目九番二号

電話 ○三・八一二・九一三一番

振替 東京七一九六八二二

印刷所 KMS (活版) / 三美印刷 (平版)

製本所 福島製本工場

「ウハチロー・ユーモア小説選 19

小 パ ち ゃ ん の あ れ あ れ 物 語



岩崎書店

もくじ

- 6 はじめのおねがい
 10 ポパを御紹介します
 14 しとやかなることすこし
 19 ママのためらい
 25 ポパのグループ語
 30 野球とおむこさんとの優劣
 35 神わざに近き特技
 39 オボグラフア悩ます
 45 ほのかなるあわれの魔術
 50 日本語のじょうずな使いかた
 56 花ムコ詩集
 61 鼻高きが故に尊とからず



- 64 小アブ中アブ大アブ
 69 しとやかなあわて者
 74 うつぶん晴らしこつこ
 80 予感的中
 84 フライパンをたたいて歌う歌
 91 ひどい胸さわぎ
 97 ひとりごとのふたりごと
 104 実にめずらしき人物
 111 ばあやのおどろきは
 シンコクなりき
 119 おもんおぼはん
 124 めんくらい交響曲

- 128 いいよどむおはん
 134 第二交響樂 こうきやうがく
 137 夢でとびおきた朝 ゆめ
 144 少女の特技と親友の魔術 どうぎ まじう
 149 お茶の間談義 だんぎ
 157 塀から出た首 へい
 163 ありがたきは親友
 168 悪童二少年のかけひき あくどう
 174 朝の矢島ヶ原 やしま はら
 178 夢に出て来たマチイとカップ ゆめ
 183 竹林の中にはいりて
 187 ああ、約束はかわされたり ややく
 194 ごきげんななめな朝

●さし絵 小林和子



- 199 おどろきの稲妻 いなづま
 202 正直に答えるとはいったが……
 206 全部おけんとちがい
 212 おろつくおもなおはん
 216 いままでにない夕暮れ ゆうぐ
 そうして夜
 223 手紙を読めば……
 230 夜明けの電話
 232 おそろいの胸さわぎ なな
 234 三少年乗りこむ
 240 群像 ぐんぞう
 244 「とんとともだち」

渡部千津子

《この本に出てくる人たち》



ラフちゃん ポバちゃんのいとこ。
本名は良二でもポバちゃんはひそかに悪二と呼ぶ。野球となると無我夢中になるわんぱくな少年。



オボチン お盆のような丸い顔の持主。本名は村瀬きよ子。ポバちゃん、アマバイと三人でゴムマリトリオと呼ばれるほがらかな子。



アマバイ 本名は柳田敏子。ポバちゃんとは大のなかよし。ポバちゃんと縁談のぶちこわしに大奮闘。中三とはいってもまだ甘えんぼう。



ポバちゃん ポバイから一字とつたのがこの呼び名。ほうれんそうが好きなのだ。本名は木暮千代子。まだまだ無邪気な中学三年生。



おもんおばはん 学校の用務員のおばさん。男勝りできかん気だとみんなから思われて評判もよくなかったのだけれど……。



ひねにこ画伯 図画の田所先生のこと。ロンドンエビスという別名もある。身体は横に大きいが色白で、いつもにこにこしてて、やさしい。



花岡先生 ポバちゃんの学校の教頭先生。年のことはいわないけれども独身。みんなからシンアレラのまま母などといわれている。

ポ
パ
ち
ゃ
ん
の
あ
れ
あ
れ
物
語

はじめのおねがい

はじめにみなさんに、おねがいがあります。

変^{へん}なおねがいののですが、聞いていただけますか。聞いていただけないとこまるのです。ぜひ聞いてください。おねがいます。

この物語には題がないのです。まだ題がきまっていないのです。どうしてもきまらないのです。こまりました。弱^よってしまいました。

人に名がなかったらどうなるでしょう。あのオとか、もしもしとか、呼^よばなければなりません。いつもその人を呼ぶたびに、……話しかけるたびに、へどもどしなればなりません。「そこにいる、なにかというと、首を左へ曲げるくせのある」とか「いつも青いリボンをかけている方」とか呼ぶのは、変です。青いリボンが、その日ライトブルーのリボンかなにかに変わ^かっていたら、また、ことです。「あのオ、そこにいらっしやるいつもは青いリボンをかけていらっしやいますのに、今日は、どういう風の吹^ふきまわしか、ライトブルーのリボンをかけていらっしやるおじょうさん」——これじゃ昔^{むかし}話にある、ジュゲムジュゲムゴコーノスーリキレ、アブラコージブラ



コージのたぐいになります。

これと同じように、題がきまっていなくて、ほんとうにぐあいがるのです。いつそのこと、ただ「物語」とか「話」とかいふ題をつけてしまおうかとも思いました。これは、うちにいた猫の名から思いついたのです。十年ばかり前にわが家に猫がきました。よそから、もらったのです。可愛い猫でした。なんという名をつけようかと相談しましたが、ちっともまとまりません。トラ、クロ、シロ、タマ、ミケなどという、いわゆる昔からある猫の名をつけるのはいやでした。家中全部が、同意見です。不賛成なのです。なるべく呼びやすく、めずらしい名を……だれでも同じでしょうが……わが家でも、これでした。

猫は女性の猫でした。(変なことばかいだと笑わないでください) リラ、マーガレット、パングイ、デイジイ、プリムラなどという名があげられましたが、みんな落第。無理ありません。あたりまえです。「あら、マーガレットはどこへ行ったの? こんなに雨がふるのに、マーガレット、マーガレット」……と呼んでごらんさい。御近所の方がびっくりします。あそこの家の人はみんな、すこし気が変だなんていわれます。一度ひっかかると、なんでもうまく行かないのです。この猫の命名も、だんだんにおかしな方向へと向かいました。ジョセフィンだの、エリザベスだのという名さえ出てきました。こうなったら、もうおしまいです。オフエリヤという名

が出てきましたときに、だれかが、「オフエリヤ、ものほしへ行きやれか」といったので、猫の名についての集会は流会となりました。結局、この猫にはチャペという名をつけました。チャペというのは、青森県弘前地方の方言で、猫ということ。牛をベコというように、猫をチャペというのです。猫すなわちチャペ。チャペ・イコール猫なのです。父の故郷が、弘前なので、チャペを思い出したのです。みなさんがよくござんじの北畠八穂さんは、たしか、父と同郷の方のようにおぼえています。猫がチャペだということは、北畠のおばさまが証明してくださると思います。猫がチャペなら、この物語に、ただ物語とかカンタンにたった一字、「話」とかいふ題をつけてもいいじゃないか。——こういう、ヘリクツに近い考えまでわいてきたのです。

でも、それではあんまりです。うまみがない。おもしろみもない。やっぱり題はちゃんとつけなければいけない。いい題をつけたいと思うのです。そこで名のない物語と書いてみました。もちろんこれは仮の名です。絵のない絵本とか、無言詩とか、歌のない歌とか、同じようなものです。

* 仇名あだなの手帳

* ニックネームブック

などというのも考えました。どうもピタリときません。ピタリとしません。

* おわらい横町 よこちょう

* ウフオホ物語

よわねんようじよざつし
幼年少女雑誌にのせるものみたいで、だめです。

* 笑う少女群 わらしょうじょぐん

* 笑うスカート

ますますもって、いけなくなりました。すこし気どった題にしようと、

* ترامペットの季節

* サキソフォンと青空

* 吹き出したアコーディオン ふ

* シロフォン物語

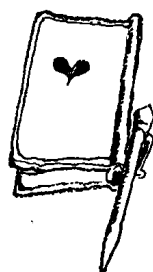
だめです。やっぱりだめです。

そこでおねがいということに、きめてしまったのです。変な へん おねがいとは知りつつ、おねがいする結果になってしまったのです。

「名のない物語」は名のない物語ではあまりにもさみしすぎるので、よい名があったらいつでも、名のある物語にしたいのです。よい名をください。それが、おねがいなのです。おしまいまで読

んでからでないとわからない、とおっしゃるのですか？ 結構です。それで結構です。ではどうぞ、おしまいまで、読んでください。おねがいたします……。

ポパを御紹介します



お笑ください。

大いに笑ってください。笑ってはいけないなどというルールは、ありません。この世の中は、そんなキュウクツなものではないはずです。道のまん中で笑おうとも、お風呂につかって笑おうとも、御勝手です。お風呂の中で笑うと、笑いの小波がたちます。あれを見ていると、また笑いたくなります。たのしいものです。笑うときには、大いに笑い、泣きたいときには、思いきり泣く。悲しみにも喜びにも、かくしだてがない。ごまかしがない。これは、少女の特権みたいなものです。少女のよいところです。

とはいうものの、すこし笑いすぎる人がある。あたりにいる人がびっくりするほど笑う。目を丸くしてたまげるほど笑う。おどろいてとびあがるほど笑う。あっけにとられてポカンとするほど笑う。こういう人がある。これは少女に多い。(耳のいたい人は、目をふさいでください。お



わかりですか。これが？)

ポパちゃんがそれだ。

ポパちゃんは、その最たるものだ。

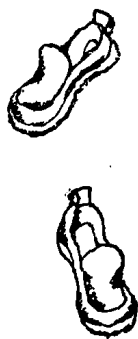
ポパちゃんは十五歳。女学校の三年生。このごろのギクシャクしたいやなコトバでいう新制中学校の第三学年に在学あそばされ中である。ポパちゃんというのは、ポパイのイをはぶいたやつだ。ポパイというのはマンガの主人公で、ほうれんそうをむしやむしやたべるあのポパイだ。ポパちゃんは、小さいころからふしぎにほうれんそうの好きな子だった。だから、よそのおかあさんは、「まあ、感心なお子さんですこと」なんておどろいたりした。ポパイみたいな子といわれているうちに、ポパちゃんとなっていた。ポパちゃんは自分もよく笑うが、人もよく笑わせる。

ポパちゃんの笑わせ話のケツ作は数々あるが、一番有名なのは、おばアさんが死んだときの話だ。当時ポパちゃんは十一歳。おばアさんが、お棺の中に入れられた。いざこれでお別れ、あとは石で釘を打つというときになった。おばアさんの大事な伴であるポパちゃんの父上が、「おかアさん、先に行って待っていてください。わたしの行くのを待っていてください。おみやげを持って、わたしもやがて行きますから……」声は涙にうるんで、はつきり聞きとれなかったが、そこにいた全部の人が全部泣いた。父上の心のうちを思ったら、こらえようとしても、涙、涙、涙

がでてしまったと、あとで、七八の人がいった。おかアさんがお棺かみのふちに手をかけ、「オカアサマ」といったきり、泣き伏ふしたのも、充分じゅうぶんたつぷり、みんなに涙なみだを流させた。おかアさんがオカアサマと呼んだのだ。ふだんなら、「あーら、おかアさんが、オカアサマだなんて」というところだが、そんなことをいう人もいない。近所ひょうどで評判ひょうばんの、仲なかのよい姑しゅうとめと嫁よめ……それがおばアさんとおかアさんだった。知らない人は、ほんとうの親子だと思っていた。それ故ゆえに、おかアさんがオカアサマと呼んだとき、棺かみの中になるオカアサマの口から、「長い間、ほんとうにありがとう。やさしくしてくれましたね。ありがとう」というコトバが出そうな気がしたと、居合いあわせた人たちは、あとでいった。お葬式そうしきにくる人なんて、みんな、あとでなにかいうようにできてゐるらしい。重なる涙で、胸むねの中が、ちぎれそうになっているときに、ポパちゃんの番がまわってきました。「あら、おばアさん、シャレてるわね」これがお棺をのぞいての第一声だ。おかアさんは涙もなにも、どこかへひっこんでしまったそうだ。びくツとした拍子ひょうしに、からだがかわばってしまったそうだ。もちろんこれも、あとでおかアさんの口から聞いたのだ。「あら、おばアさん、だいじようぶ」これが次のコトバだ。「わらじなんかはいて」ここでポパちゃんは、首をかしげ、いささか心配そうに、「歩くつもり、向こうまで。たいへんでしよう。リntaxにしたほうがいいわねえ、パパ」とおとうさんのほうをふりかえり、「そうだ、パパの会社のトラックをまわしても

らうのが一番よ。おばアさん、そうしなさいよ」ここまででは、どうやら吹きだしたいのを、こらえていたらしい。だれがって、みんながです。ところが、その後のポパちゃんのコトバで、みんながまんは、プツパツ、といっせいに破れてしまった。なんていったかつて。「トラックがくるんだったら、あたし、途中までいっしょに行こうかしら。トラック、どっちを通っていくの。一番町のほうをまわってくれて、たのもうツと」……ああ実に、あつぱれ、みごとなものである。これもあとで、居合わせた人びとの口からなにが出たか。出たことは出たが、感動したとか……その心根を思うと涙が先に立ってとか……どうしていいやらわからなくなってしまう……こういうたぐいのコトバは一つも出なかった。「ただおどろき」「仏さまも苦笑」「いやはや、評判以上のおじょうさん」「何十回となくお葬式には行ってますが、生まれて初めて」「古今絶後」等々、ほめてるのか、けなしてるのか、見当のつかないコトバばかりだった。よく笑い、然うしてよく笑わせる少女、ポパちゃんのひととなり、これによって、知るべし。

しとやかなることすごし



「笑うなっていって無理よ……あッと思つたら、スポリなのよ……そのまま、五、六歩、歩

いてッたんですもの……笑うんじやない。めッめッ、これッ……と、しかったって、まにあいはしないわ。まにあうもんですか……全然いけません……むです。……ききめなし……笑いのほうが強いよ。ころがったわ……とまらないんですもの……ごめんなさいというおうと思っても、それさえ、口から出ないんですもの……」

ポパママは、顔をあげた。

ちらりと柱時計を見た。三時十五分すぎだ。

「だれと話してるのか知らないけど、なんて大きな声を出すんだろうね、あの子は」

ポパママは、ちょッと眉と眉の間にシワをよせた。これはたいしたことじゃない。気にしないでもいい。洋の東西を問わず、いにしえよりいまに至るまで、そうしてまたこの後も永久に、世の母なる人が、なにかというによくやる型の一つである。

これをやらないと、母親らしく見えない。眉をしかめるのが一人前にできるようになると、ちょッとしたおかアさんになったしるしなのだ。

ポパママは、すでに、もうちょッとしたおかアさんだ。ポバちゃんの友だちから、ポパママな名を贈呈されてから五年もたつから、相当なもんだ。

「では、ここで……」